

Title	明治十五年朝鮮事變と花房公使(武田勝蔵著)
Sub Title	
Author	宇宿, 捷(Usuku, Sho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.178(500)- 179(501)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本の發見、日本に於ける吉利支丹の運動。アレックスandro・リニヤニ師の第二回の來朝。千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題(此分メテナ氏著笠井鎮夫氏譯)。十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版(此分テ・フレイタス氏著岡本良知氏譯)。アッシュタ文庫に在る日本關係の未刊書に關する覺書。

ガイドオ・グワルチエリが日本使節記(伊東マンシオ一行の)に就いて。ポルトカルロ・スベニヤよりイタリヤへ(グワルチエリ日本使節記の抄譯)。四遣歐使節の歸朝(此分アッシュタの夫刊行書の一部を岡本氏が譯註を附せられたるもの)。支倉六右衛門の事、附アマチが『奥州記』、西班牙の風物と其國の植民傳教史(オットオ・マアス師が西班牙記)。

以上の十一篇、今一に之を紹介する暇がないが、『日本の發見』や『日本に於ける吉利支丹の運動』の記述の方法は氏獨特のものであり、又譯文の暢達、字句の洗練されたるを見るにつけ近頃貧しい翻譯に從つてゐる筆者は、讀みながられたましいやうな心持を禁ずることが出来なかつた。

なほ扉に用ひられた一五八六年刊の西班牙、葡萄牙の地圖と他四十二箇の挿入圖とは内容と相まつて私の心を射る。四年十一月二十四日(吉田小五郎)

明治十五年朝鮮事變と花房公使(武田勝藏著)

本年子爵花房義實翁の十三回忌に當り、翁を追想する一資料として、翁の事歴中最も記念すべき、明治壬午朝鮮事件を中心とし、

其間の事情を記述せしもの、即ち之なり。

この「明治十五年の朝鮮事變」は後に起りし日清日露の二大戦役の導火線とも見らるべきものなり。

此の事變を惹起せし原因は、當時朝鮮半島に於ける、開化黨並に守舊黨と稱せられし兩黨派の黨争に端を發す。當時半島の政治は親政なりしも、その實、王妃閔氏竝に其の權威に左右せられし爲め、國庫も窮乏を告げ、從つて舊軍兵卒の俸料米を給與せざること、十數ヶ月に及びたるも、政府は之を顧みざる爲め、不平の聲充滿するに至り、加ふるに開化黨の爲めに地位を失ひし士、或は改革を喜ばざる從等が積年の憤怒を雪ぐ爲めに、彼等を陰に陽に煽動せし上、更に浮浪の者等も之に加擔し、事件を悪化し、遂に内亂を起すに至れり。豺狼の如き暴徒は、七月廿三日の午後西大門外清水館なる、日本公使館を襲撃し、翌日は雲峴宮に赴き、大院君に大訴し、進んで昌德宮に闖入し數人を殺戮し、且つ閔妃をも害せんとせしも得るところなかりき。大院君は、この期を逸せず政權を掌握し、再び攝政となれり。

一方清國にては、この政變に對し、内亂鎮撫を名とし、數千の兵を朝鮮に送り、城内の鎮撫に力め、大院君を虜し清國に拉去せり。これ所謂「壬午の政變」と稱するものなり。次に殺戮破壊横行蹂躪の數限りを盡せし亂兵暴民は其の餘勢をもつて、城外の清水館なる我が公使館を圍繞し、駐劄の我が公使以の身體にせまれり。ここに於て防戦に力めしも、衆寡敵せず唯壁殺を待つのみなりしかば、一同は意を決し、廿八名一團となり、日軍旗の下に、寄せ来る賊を斬り伏せ雜倒し、暫く血路を開き仁川に逃着きぬ。心身共に

極度に疲勞せし一行は、横臥する間もなく再び亂徒の襲撃に會ひ、苦戦の結果數名の死者を後にし、幸じて濟物浦に逃るゝを得たり、かくて一行は南陽灣附近の海底測定に従事し居りし、英國測量船フライング・フィッシュ號に救助せられ、艦長ホスキンの義侠的慮意により、長崎に歸着するを得たり。

かくして京城に於ける不慮の突發事變の變報一度外務省に電申せらるゝや、朝野を震動し、その驚愕憤激は名狀すべからざる有様にて、議論沸騰し征韓論を唱ふるものすら起れり、又新聞・錦繪・芝居は遭難を描寫報導し、公使以下の勇敢なる行動を激賞せり。

廟議の結果は井上外務卿を下關に派遣し、公使に與ふるに我が政府の談判の方針竝に訓條・内訓條・内訓狀を以て強固に抗議を申込みぬ、その結果花房公使以下數氏の再渡鮮となり兎に角平和の中に十五年の朝鮮事變は解決せしなり。

最後に堀本氏以下當時漢城の地にて殉難せられし諸氏の英靈を敬慰すると同時にいさゝか本書の内容を紹介し以て筆を擱く。(昭和三、十、卅一 宇宿捷)

神道講座の發刊

近來往々一部人士の間に思想國難の聲を聞くのであるが、この語の思想内容に付ては、常に疑を懷いてゐる一人である。といふのは、それは外來思想を以て悉く危険視すべきものとなす、口吻を多分に窺はしむるものがあるからである。

外來思想が果して危険であるかどうかは姑く別問題としても、それを危険視する前に、虚心坦懐、その合理、不合理を批判する餘裕はないものであらうか。

私一個人としては、思想そのものに於てよりは、むしろその思想に對する吾々の態度に、より多くの危険性があるのではなからうかと思ふ。

思ふに思想が思想である限り、思想として理解せられなければならぬと同時に、それが吾々の實生活を指導するためには、一定の民族性若しくは社會組織に對して、合則的な適應關係を有せしめなければならぬ。

この兩者の綜合にこそ眞の意味の健全なる國民思想は求められるのではあるまいか。

要するに、抽象的な理論と吾々の實生活との具體的な關聯交渉に於ける吾々の態度に外ならない。(この際鋭い内面的自己反省を要することは勿論である)。

最近の思想に對する取扱は、單に理論に走り、演繹に偏し斯る反省と、それに由て來る歸納的態度を缺ける點に遺憾があるのではなからうか。

自國に對する無理解は之に導く直接の原因であらうと思ふ。こゝに於て國民道德の淵源であり、精神生活の基調であるわが神道に付て正しい知識を得るといふ事はたしかに無意義ではな

い。
今回の「神道講座」は(幸ひ講師として斯界の權威を網羅し得たと思はれる)讀むべき書である。安んじて江湖に推薦し得ると思